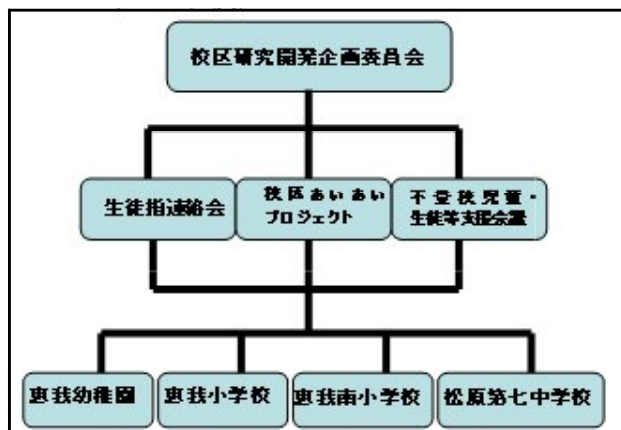


研究開発の内容

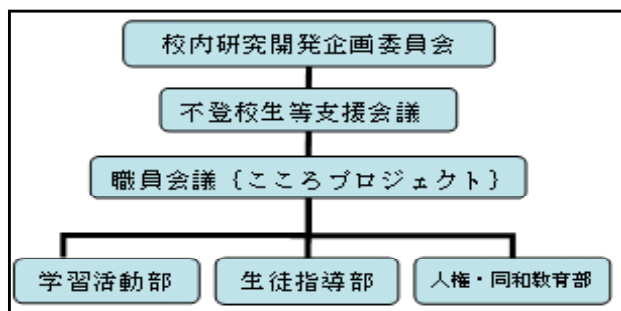
1. 研究組織

1) 松原七中校区



組織の要は、校区研究開発企画委員会である。ここで、研究計画や研究内容等を企画、立案を行っている。校区で子どもを育てるという目的で、6年前に立ち上げた「校区連絡会」が発展した組織である。各校では、「校内研究開発企画委員会」を発足し、取組を進めている。プログラムづくりは、「校区あいあいプロジェクト」で、不登校児童・生徒支援は、「校区不登校児童・生徒等支援会議」で、また、子どもの実態交流や進路等については、「生徒指導連絡会」で論議し、取組を進めている。

2) 松原市立松原第七中学校

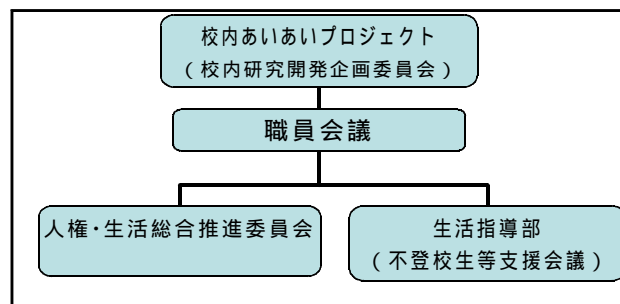


松原七中では校内に研究開発主任・教務・子ども支援コーディネーター・人権同和教育担当・生徒指導担当・学年代表・各学年より1名・情報教育担当・事務職員からなる校内研究開発企画委員会を設置し、研究開発の中核を担い、校区連携の窓口としている。不登校生支援については、管理職・子ども支援コーディネーター・生徒指導担当・養護教諭・人権同和教育担当・スクールカウンセラー・研究主任・教育アドバイザー・学年代表による「不登校生等支援会議」（週1回）を設置し、研究推進の中核組織としている。また、全教職員で人間関係学科の推進、不登校生への支援に

ついて検討する「こころプロジェクト」（職員会議内に位置づけて）を月1回実施している。

さらに、運営指導委員会や松原市不登校児童・生徒総合支援会議、松原市教育支援センター（チャレンジルーム）等の学外関係組織との連携も強めている。

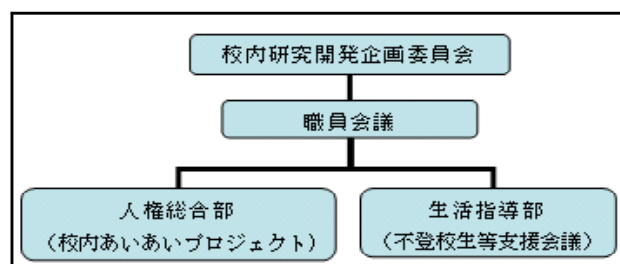
3) 松原市立恵我小学校



恵我小では、管理職と校内あいあいプロジェクトのメンバーからなる校内研究開発企画委員会を設置し、中心を担っている。校内研究開発企画委員会では、プログラム開発や研究体制の確立など、研究開発の推進に努めている。不登校及び長欠児童の支援については、月1回の生活指導部会において子どもたちの実態を把握し、さらに校内不登校児童等支援会議において、不登校児童の実態交流と担任への支援について検討している。

また、研究開発担当・教務・不登校児童支援担当を中心に校区研究開発企画委員会などの校区での連携・調整にあたっている。

4) 松原市立恵我南小学校



恵我南小では、研究主任・教務・人権・同和教育担当、生徒指導担当、各学年より代表1名、情報教育担当、事務職員からなる校内研究開発企画委員会を設置し、校区連携や研究開発の中心を担っている。人権総合部（校内あいあいプロジェクト）を中心に、校区あいあいプロジェクトと連携し、プログラムづくりを進め、また、校内授業研究や校内研修を企画運営している。

不登校及び長欠児童の支援については、月1回の生活指導部会において子どもたちの実態を把握

し、さらに校内不登校児童等支援会議は、管理職、生指部長、人権・同和教育担当、養護教諭、研究主任、学年教員、スクールカウンセラーで構成し、支援のあり方を検討している。全て職員会議において、確認し、共通認識をはかる。

2．教育課程の編成

恵我小学校・恵我南小学校													
	各教科の授業時数								道徳	特別活動	総合的な学習の時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭科					
第1学年	272		114		102	68	68		90	34	34		782
第2学年	280		155		105	70	70		90	35	35		840
第3学年	235	70	150	70		60	60		90	35	35	70-35	910
第4学年	235	85	150	90		60	60		90	35	35	70-35	945
第5学年	180	90	150	95		50	50	60	90	35	35	75-35	945
第6学年	175	100	150	95		50	50	55	90	35	35	75-35	945
計	1377	345	869	350	207	358	358	115	540	209	209	290-140	4548

小学校の「人間関係学科」の授業時数は、3年～6年は、「総合的な学習の時間」より特設した年間35時間である。なお、1・2年は、教育課程を変更せず、特活の時間内で15時間程度実施する。

松原第七中学校

	各教科の授業時数									道徳	特別活動	選択教科	総合的な学習の時間	人間関係学科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術家庭科	英語						
第1学年	140	105	105	105	45	45	90	70	105	35	35	0	65-35	35	980
第2学年	105	105	105	105	35	35	90	70	105	35	35	70	50-35	35	980
第3学年	105	85	105	80	35	35	90	35	105	35	35	140	60-35	35	980
計	350	295	315	290	115	115	90	175	315	105	105	210	175-105	105	2940

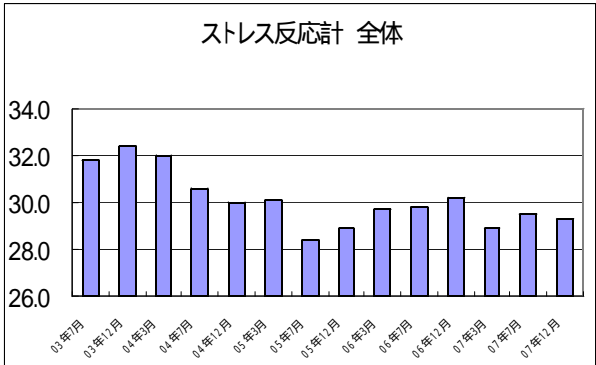
中学校の「人間関係学科」の授業時数は、「総合的な学習の時間」から特設した35時間である。

3．子どもの実態から

1）松原第七中学校

人間関係学科（HRS）導入後

松原七中では、2003年度から2005年度の3年間、文科省の研究開発の指定を受け、人間関係学科（HRS）の創設を行った。初年度から始めた学校生活調査を通じて、子どもたちが大きなストレスを抱え、それが子どもたちの日常生活に大きな影響を与えていることがわかった。私たちは子どもたちがストレスについて正しく学び、理解することが、ストレスと上手につき合い、良好な人間関係をつくることのできるための第一歩だと考えた。



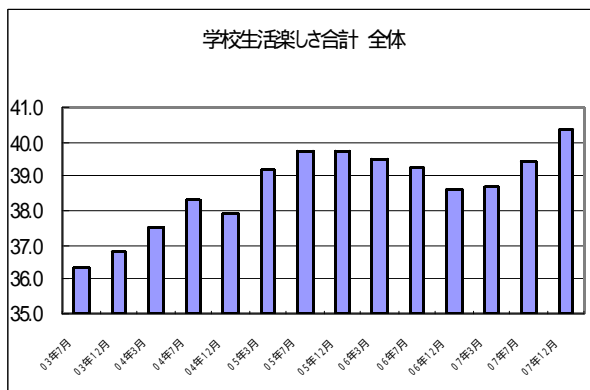
さらに二年目は、子どもたちが自分の良さを発見できず、自信を持てずに悩んでいる姿から、自己肯定感に注目して研究を進めていった。その結果、自己肯定感を高めていく要素は、

- ・ほっとできる居場所をつくる力をつける
- ・人との関係を築く力をつける
- ・自分の良さを発見できる力をつける
- ・家庭との連携をはかる

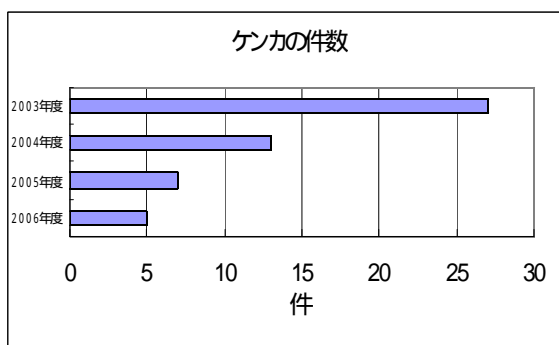
ということであった。

そして、三年目の最も大きな課題は、ストレスをマネジメントし、自己肯定感を高めていくための、人間関係学科（HRS）の完全開発（年35時間×3年分）であった。プログラムの開発にあたっては、自己肯定感だけではなく、自分と社会とのつながりを意識していくための社会的有用感を育てることをめざしてきた。

その結果、子どもたちにおける学校生活満足度（楽しさ度）の上昇・不登校率の減少・暴力事件の減少などが見られた。これは、「人間関係学科（HRS）が楽しみだ」と答えている子どもが90%を越え、さらには「人間関係学科（HRS）で考えが広がった」と答えている子どもが85%にもものぼっている事実からも、人間関係学科（HRS）の成果であると言える。



今回の研究開発においては、この成果をより確かなものにしていくために、校区としての研究開発に取り組み、小学校も含めた9年間を通じて、人間関係づくりを進、義務教育の最終段階としての中学校で、社会的有用感をはじめとした「社会の中で人々とかわりをもち、社会をつくっていく力」をどう子どもたちの中につくっていくかということを研究開発の中心課題として進めている。



2003年度から今年にかけて5年間、各学期末に学校生活調査を実施している。学校や家庭での生活における子どもたち自身についてのアンケートである。その内容は、

- ・ a 学校生活の楽しさ
- ・ b 悩み
- ・ c ストレス反応
- ・ d ストレス対処
- ・ e イライラ
- ・ f 自己肯定感

に関するものである。前回の研究開発において、これら6つの領域に関かかわるアンケート結果をデータ集積し、様々な観点から分析していくことにより、子どもたちの実態を把握してきた。そして、そこから出てきた子どもたちの課題に応じた人間関係学科（HRS）のプログラムを子どもたちに提供し、各授業のふりかえりにおいては「ふりかえりシート」を、各学期のまとめにおいては

「HRS自己評価」を実施し、子どもたちの成長と課題を確認してきたのである。本年度を研究開発5年目と位置づけ、これまで取り組んできたアンケート調査によるデータ集積・効果測定を継続発展させ、今回の研究開発の柱としていきたいと考えている。

いじめ・不登校の状況

2006年度、「いじめ」の深刻な実態が全国的に明らかにされた。これまでの「自分よりも弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」という定義は、「いじめ」の被害を受けた子どもに寄り添う視点から、「一定の人間関係のある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」という定義に変更された。また、「発生」件数調査から、「認知」件数の調査に変更された。本校では、これを受けて、被害を受けた子どもの立場に立って、「認知」そして「取組」を、という視点で、子どもの状況把握をより詳細につかもうと努力した。大阪府教育委員会の「いじめ防止プログラム」を参考にして、10月には校内で「ほっとアンケート」を実施した。また、週1回の「不登校生等支援会議」で日常の子どもの様子から、いじめによる被害を受けていないか、交流を行っている。

「調査のための調査でなく、取組のための調査（森田洋司氏）」と指摘されるように、子どもたちの集団の病理に対して、日常生活の中で正義感、公平感を養い、対応の中で強く信頼関係を築き、そうしながら、学校の中で相談機能を整備していく取組を進めている。そして、日常の生徒指導のなかで、厳しい状況に置かれた子どもを「困った子ども」ではなく、「困っている子ども」であるという意識の変換と支援という視点で取り組もうと共通認識している。

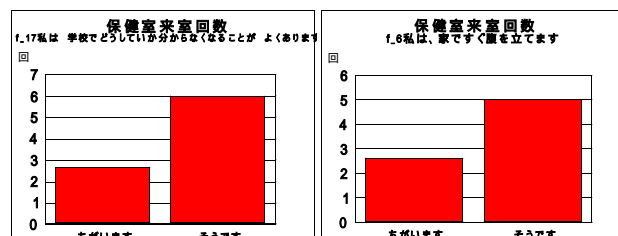
保健室は、子どもが「しんどい」体・気持ちを訴えに来る最も身近な場所である。どのような意識をもつ子どもがよく来室するのか調査した。自己肯定感を問う25項目の中で、「ちがいます」と「そうです」の2つの群による来室回数の平均値を比較した。

5項目で、「そうです」と「ちがいます」と答えた群で差が有意であった。

f_1	私は今の自分とはちがう人になりたいと思います
f_2	私はクラスみんなの前では、たいへん話にくいです
f_6	私は家ですぐ腹を立てます

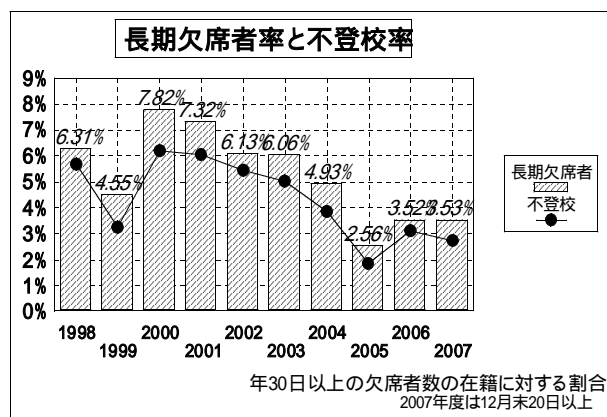
f_16 私は家を出たいと思うことが たびたびあります
f_17 私は学校でどうしても分からなくなることがよくあります

上の項目で「そうです」と回答した子どもは、学校や教室で自分の居場所を見失いがちな子どもであるという実像が浮かんでくる。



「いじめ」の受けやすい位置にある子どもを「受容」しエンパワーする場所として、保健室は大切な役割を持っている。

本校の長期欠席と不登校の状況は以下の図のようになる。



不登校率が6%以上であった2000年度（平成12年度）から、2%台になった2005年度（平成17年度）までは右下がり減少したが、昨年度から3%台にやや増加している。

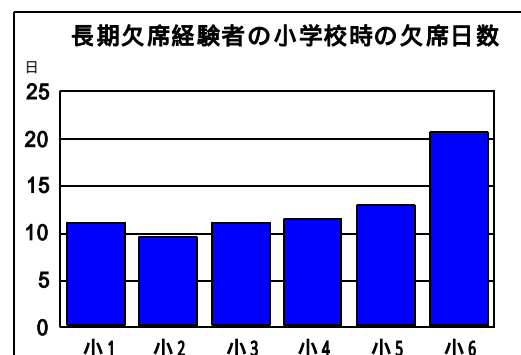
「学校を休む」子どもは、依然として存在する。「不登校」だけでなく、「病気」による長期欠席する子どももわずかであるが、いる。

本校の調査では、欠席日数と学力（テストの成績）は、明確な相関がある。長期欠席や不登校の子どもたちが、中学校卒業後の進路選択において、「学力」が身につけていないための狭められた選択を強いられていることは、明らかである。

不登校に基づく、学力格差から将来の社会的な格差につながる可能性は極めて高い。不登校の未然防止と不登校からの復帰は、「格差」「差別」の再生産という循環を断ち切る重大な課題であると考えている。

中学校の3年間で、いずれかの学年で30日以上長期欠席を経験した子どもたちは小学校のとき、平均すると10日ぐらい欠席していた。

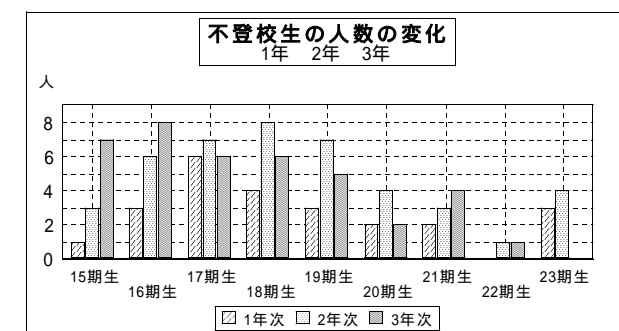
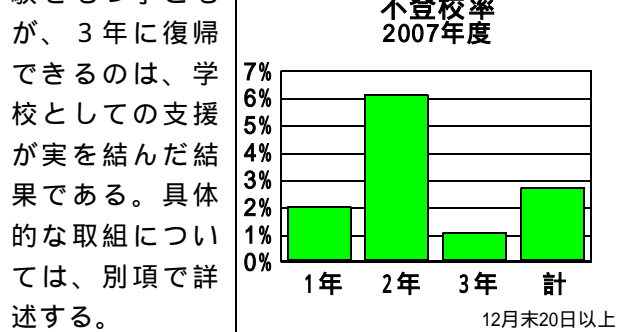
小学校の欠席日数が資料として存在する19期生から23期生（現2年生）の25名について調査すると、下の図のようになった。



小学生のときに、年間10日以上欠席する子どもは、中学校で長欠・不登校になる可能性が大きいということである。この分析をもとに、本校は校区小学校に年10日以上欠席する子どもへの取組が大切であることを提起している。

本校と校区の小学校では、校区不登校生等支援会議を年2回行っている。小中の不必要な段差解消、スムーズな中学校への進学に欠かすことができない取組である。

本校では、2年生で不登校率が高い。不登校経験をもつ子どもが、3年に復帰



2) 恵我小学校

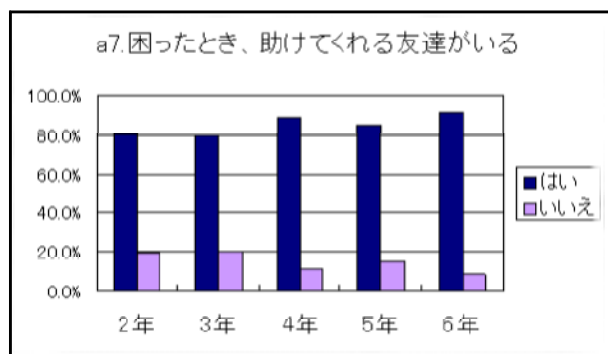
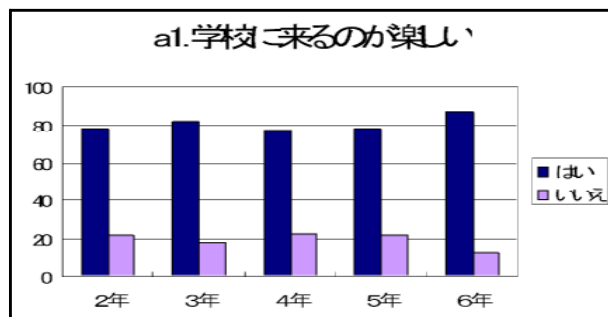
学校生活アンケートより

両小学校では、「学校生活アンケート」を初めて実施した。その内容は、a)学校生活楽しさ b)悩み c)ストレス反応 d)ストレス対処 e)イライ

ラに関するものである。子どもたちの現状や気持ちを把握し、課題を明確にするために、校区で、各校毎学期末に学校生活アンケートを実施している。

各校のアンケート（7月・12月実施）の数値から見える子どもたちの実態について、また子どもたちの意識の変化について見ていく。

a) 学校生活楽しさ度



「学校に来るのが楽しい」と感じている子どもはどの学年も80%前後いる。また、「困ったとき、助けてくれる友達がいる」と答えた子どもは80%～90%いる。逆に、「楽しくない」と感じている子どももあり、その子たちは学年でも気になる子どもたちであることがわかった。その子ども達への支援が、今後必要である。

b) 悩み

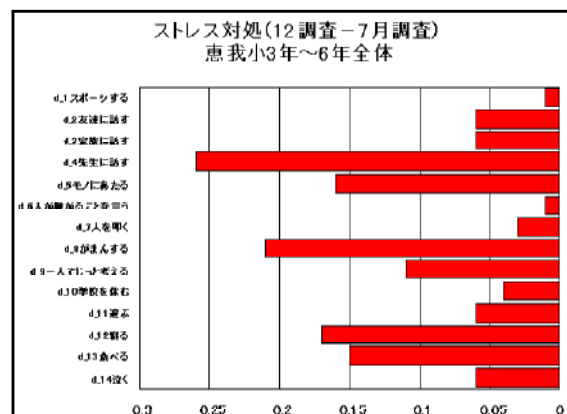
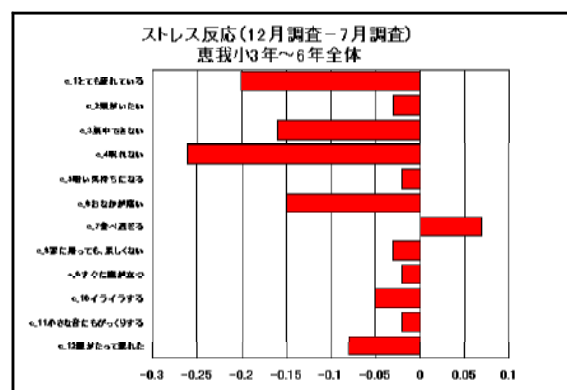
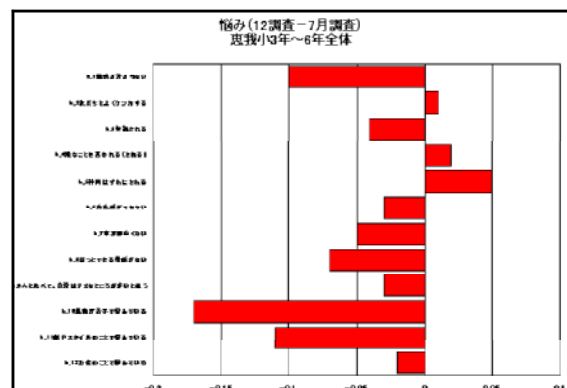
1学期と2学期を比べると、全体として悩みは減少傾向にある。増えているのは、「友だちとよくケンカする」「嫌なことを言われる（される）」「仲間はずれにされる」の項目で、友だち関係における悩みが多くなったことがわかる。

c) ストレス反応・ストレス対処

悩みが減少傾向にあるためか、1学期と比べ、全体としてストレス反応もストレス対処も減っている。その結果、「がまんする」などの抱え込み型の対処が減ったものの、「先生に話す」という対処も大きく減っている。教師が子どもの様子や変化を把握し、出来る限り早期に、また的確に悩みを受けとめていくことが必要だと考えられる。

学年別に見ると、4年～6年生はストレス反応

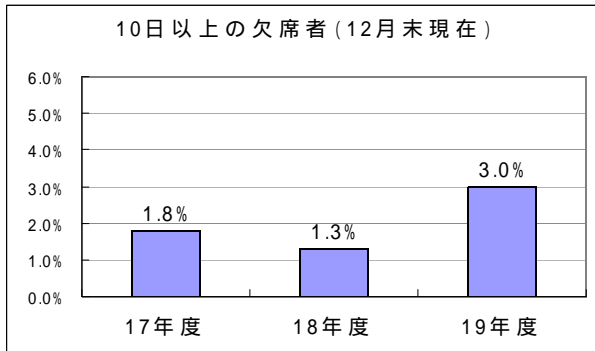
の傾向が似ていて、「イライラする」、「すぐに腹が立つ」、「家に帰っても楽しくない」、の項目が多くなっていることがわかった。ストレス対処の方法の変化を見ると、2学期ストレスマネジメントのワークを行った3年生は、「スポーツをする」「遊ぶ」という積極的対処が増加し、攻撃的対処は減っていることが確認された。一方6年では「友達に話す」が増えたが、「モノにあたる」「人がいやがることを言う」「人を叩く」などの攻撃的対処も増えている。思春期における心の変化にも留意しながら支援していく必要があるだろう。



不登校児童の状況

年間10日以上欠席者の割合は12月末現在で下のグラフのとおりである。2006(平成18)年度では最終的に5%の子どもが年間10日以上欠席している。入院をともしう大きい病気を持つ

子どもや、塾や受験のための欠席が高学年の一部には見られるものの、その多くはしんどい、が痛いというような理由や一旦風邪などで休むとしばらく引きずるといような状況での休みが多い。明らかに体調以外での理由が見受けられるのがはっきりしている子どもは4名であった。



2007(平成19)年度については傾向としては変わらないが、12月末現在で3.0%が10日以上欠席している。12月末の状況としては割合として増えているものの2006(平成18)年度10日以上欠席した子どもの中で25.8%の子どもが2007(平成19)年度欠席数が大幅に減少している。反面2006(平成18)年度に名前が上がり継続して調査している子どもの中で、既に10日を越えるものあるいは10日にせまるものも45.2%いる。年間10日以上欠席する子どもの多くは、それ以前の年度でも10日以上欠席する子どもが多い実態が見受けられる。課題としては、欠席理由の迅速な把握と当該児童への対応、また校内不登校支援会議での追跡調査と支援の充実が考えられる。

いじめの状況

下校途中に、一緒に帰っている子に仲間はずしをしたり、相手が傷つく悪口を言っていた「いじめ」事象があった。事例は、取組の中で、後述する。

いじめ・不登校の未然防止に向けて

担任として

- ・Aが心を強くして、自分の気持ちをしっかりと言えるように支えていく。
- ・周りの子のそれぞれの置かれている立場にせまっていく。
- ・保護者との密接な連携を図る。
- ・小さな変化を見のがさない日々の観察。
- ・遊びの指導

学年として

- ・学級任せでなく学年教師集団としての取組
- ・人権学習の充実
平和学習、障害者理解学習、環境学習等、生活科、総合学習と関連させた取組
- ・人間関係づくりの授業(あいあいタイム)
学校として
- ・研究部の一つである「生活指導部」が中心となり、早期発見、早期の取り組みの方針を管理職とともに明らかにする。
- ・年間4回の子ども実態交流会(生活指導事例研究を含む)を行い、全教職員の共通認識を図る。

恵我小の不登校生支援会議は、「予防と支援」をテーマに松原市や松原七中校区の不登校生支援に連携して進めてきた。2006年度よりそれまでの30日以上欠席から欠席累積10日を目途に状況把握をおこなうことになった。それにともない「予防」の視点から2006年度10日以上欠席した子どもについては2007年度からは累積欠席数に関わらず毎月の欠席等の状況の把握を行っている。また、2006年度に10日以上欠席していなくても2007年度当初に気になる状況にある子どもについては同様に毎月の欠席等の状況の把握を行っている。とりわけ欠席とともに遅刻についての把握も重要視している。これらの子どもについての状況は次年度以降についても継続して調査していくことにしている。

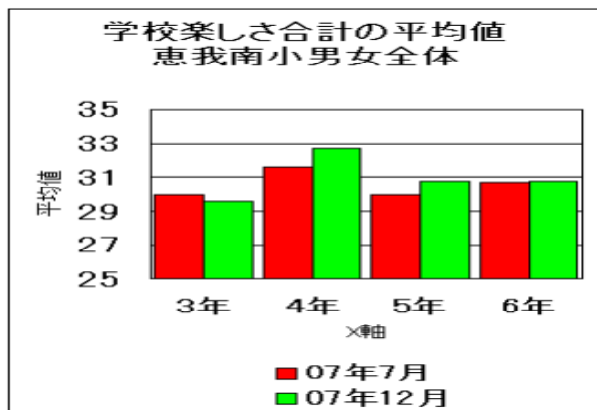
その中で「支援」として、欠席数累積10日になった時点で情報の交換を行い、課題を把握し、必要に応じて関係諸機関等との対応を個別に協議している。

3) 恵我南小学校

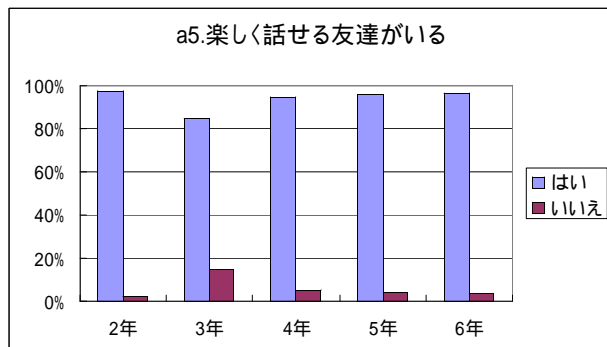
学校生活アンケートより

子どもたちの現状や気持ちを把握し、課題を明確にするために、「学校生活アンケート」を実施している。アンケート内容は、恵我小と同様である。

a) 学校生活楽しさ度の変化

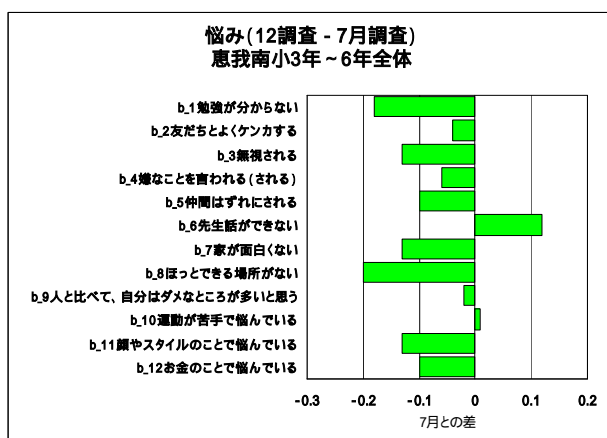


このグラフは、「学校に来るのが楽しい」「楽しく話せる友だちがいる」「休み時間は友だちと楽しくすごしている」など「学校楽しさ度」10項目の回答値の平均である。7月から12月にその平均値がおおむね増加していることがわかる。



このグラフは、12月の「楽しく話せる友だちがいる」の割合である。どの学年も80%を超えている。2年生は、アンケートの回答の仕方を12月より他の学年と同様の形式に変更した。「いいえ」と回答した子どもを継続的に見守る必要がある。

b) 悩み

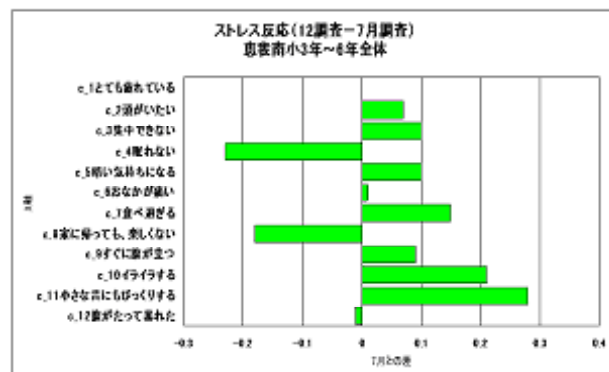


「悩み」に関する「勉強がわからない」「友だちとよくけんかする」「無視される」「嫌なことを言われる(される)」「仲間はずれにされる」「ほっとできる場所がない」等の項目は、アンケート

結果から、7月よりも12月では、全体的に減少しているということがわかる。一方で、「先生と話ができない」「運動が苦手なので、悩んでいる」は、微増している。「あいあいタイム」の時間だけでなく、日常の学校生活においても、子どもへの関わり方を意識し、子どもと教師の信頼関係を深める指標としていきたい。

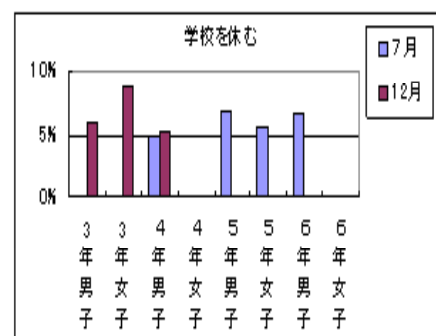
c) ストレス反応

このグラフは、「暗い気持ちになる」「イライラする」「腹がたって、あばれた」などの「ストレス反応」の変化である。「ストレス反応」の数値は、7月から12月で微増している。子どもたちが学校や家庭における日常生活を通じてストレスをためていることがわかる。また、「イライラする」は、微増しているが、「腹がたって、あばれた」は、減少傾向にある。本年度は3年生と6年生で、「ストレスマネジメント」のワークを実施したが、今後、「ストレスマネジメント」のワークを学校全体で流れを整理し、取り組んでいく必要があると思われる。



d) ストレス対処

ストレス反応に対し、ストレス対処として、「スポーツする」「友だちと話す」「家ぞくに話す」「先生に話す」のように積極的に対処する、「物にあたる」「人のいやがることを言う」「人をたたく」のように攻撃的に対処する、「我慢する」「学校を休む」のように抱え込みで対処するなど分類している。その中の「学校を休む」という抱え込み対処の仕方に対して、7月から12月で、全体的に減少傾向にあり、高学年においては、12月の回答は、0%である。また、いじめ・不登校の予防



の観点からも、「学校楽しさ度」の増加とストレス対処として「学校を休む」ことの減少という2つの項目の関連性について、今後も着目し、取り組んでいきたい。

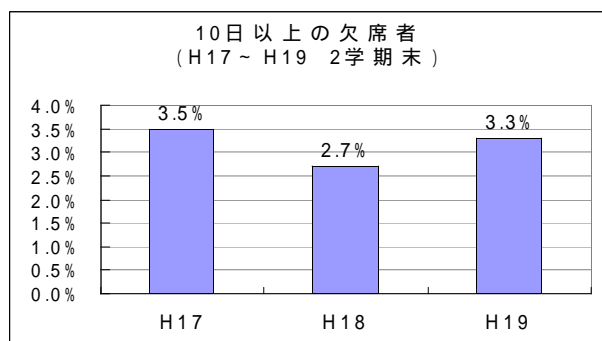
不登校児童の状況

本校は、全校児童240名程度と比較的小規模ということもあり、ここ数年、年間30日を超える長期欠席・不登校児童がいない状態が続いていた。

しかし、小学校で年間欠席日数が10日以上の子どもが中学校で長欠・不登校になりやすいという松原七中校区の不登校生等支援会議の論議をふまえ、2006（平成18）年度以降、累積欠席日数10日以上29日未満の不登校傾向の子どもの実態を把握している。不登校予防の観点からも、実態把握や情報収集を今後も継続的にを行い、取組の方向性を明確にしていくことが大切である。

下のグラフは、2学期末欠席日数10日以上の子どもの数の3年間の推移である。

2005（平成17）、2006（平成18）、2007（平成19）年度2学期末



10日以上欠席児童の比較をみると、2005（平成17）年度は、3.5%、2006（平成18）年度は、2.7%、2007（平成19）年度は、3.3%となっている。

昨年度10日以上欠席した12名の児童の内、2学期末で8名が5日以内の欠席日数となっている。今年度は、骨折等で長期入院した児童2名と、急激な家庭状況の変化による欠席の児童が2名おり8名となっているが、これらの特別な事情を持つ児童も含めて、「あいあいタイム」の実施と長欠・不登校児童への支援の効果を表す指標として、今後も継続して着目していきたいと考えている。

また、不登校傾向の子どもの中には、親しい仲間がいない場合や「病気による欠席」とは言い切れない場合があり、その子を取り巻く状況を整理・分析し、クラスの仲間との関係にも配慮し、集団づくりにつなげた取組が、今後も必要である。さらに関係諸機関との連携を含めた取組も進めて

いるが、事例は取組のなかで後述する。

いじめの状況

いじめは表面化しにくく、些細なもめ事や事件がきっかけでいじめが起きないように、複数の教師の目で日常の学級集団を注意深く観察するようにしている。さらに子どもたちの「気になるサイン」を敏感に受け止められる信頼関係を築くため、定期的に「あいあいタイム（学校生活）アンケート」等で子どもの状況を把握するようにしている。

取組を進める中、本年度の1学期と2学期のアンケートの結果から、嫌なことを言われたり、無視されたり、仲間はずれにされる子どもたちが減っており、困った時に助けてくれる友だちがいる、先生に困ったことを話せる子が増えている等の傾向が見られた。事例は取組のなかで後述する。

いじめ・不登校の未然防止にむけて

生指部会や校内研修会等で報告された悪口や仲間はずれの事例が特定の子に対するいじめに発展していないか、その都度内容を確認し、早期発見や予防に努めている。

- ・年度当初に生活や仲間関係等で様々な課題を抱える子どもについて生活指導部で共通理解をし、その後クラスの仲間とどのような関係がつくれているかを校内生活指導研修会（前期）で全体交流をした。
- ・1学期、学童指導員と交流会をもち、生活や仲間関係で課題を抱える子どもについて共通理解を深める。
- ・毎月欠席調査を行い、生活指導部で不登校傾向の子どもについて情報交換する。
- ・毎月、子どもの様子を交流し、いじめに関連した事例については、時間をかけて部内で学習会を行い、他学年でも似た事例がないか検討する。
- ・【いじめを早期に発見するポイント】（「生徒指導の充実のために」大阪府教育委員会発行資料）を参考に、該当する子どもが各クラスにいないか検討する。
- ・いじめ問題が発生したときの対応を学習する。
- ・不登校・いじめ等課題となる子どもを中心にクラスの仲間づくりについて、その後の経過を校内生活指導研修会（後期）で交流する。

4．人間関係学科の取組

1）松原七中校区

目標 めざす子ども像

人の思いを受けとめ、自分の思いを表現できる子ども

自分を見つめ、自分で考えようとする子ども

人を信じ、人とつながろうとする子ども

《11年間で獲得させたいターゲットスキル》

	幼稚園	低学年	中学年	高学年	中学生
自己信頼	□	○	○	○	○
自己管理能力	□	○	○	○	○
感情対処	□	○	○	○	○
コミュニケーション力	□	○	○	○	○
対人関係	□	○	○	○	○
ストレス対処		○	○	○	○
ピア・プレッシャーへの対抗	□		○	○	○
時間管理	□		△	○	○
境界設定	□		△	○	○
決断と問題解決	□		△	○	○
計画性	□			○	○
情報活用力				○	○

- ・「自分の長所や短所を正しく判断し、自分を認めることができる」(自己信頼)
- ・「自分の生活をコントロールできる」(自己管理能力)
- ・「怒りや悲しみなどの感情をコントロールできる」(感情対処)
- ・「いろいろな人と適切に対話できるコミュニケーション力をもつ」(コミュニケーション力)
- ・「まわりの人と適切な関係を築くことができる」(対人関係)
- ・「ストレスに対して適切に対処できる」(ストレス対処)
- ・「仲間からの圧力に対して、自分の考えを伝え、行動することができる」(ピア・プレッシャーへの対抗)
- ・「自分自身の時間を有効に活用できる」(時間管理)
- ・「自分と他人の間に適切な距離を置き、自分らしさを表せる」(境界設定)
- ・「身のまわりに起きたことや、自分自身の課題に対して、自らが考え、取り組むことができる」(決断と問題解決)
- ・先を見通し、計画的に課題をこなせる(計画性)
- ・まわりからの情報を積極的に取り入れ、物事に活用する(情報活用力)

校区の取組

2006年度、大阪府の「子どもの未来ハートフル推進事業」の指定を受け、校区人研で、松原七中校区の子どもたちの実態や課題を話し合い、

子どもたちの現状や課題をふまえ、松原七中校区として『めざす子ども像』を設定した。めざす子ども像を追求するため、上記の表のように、幼・小・中11年間で獲得させたい12項目のターゲットスキルを設定した。松原七中校区としての人間関係づくりのプログラムの作成のため、「校区あいあいプロジェクト(以下、校区あいプロ)」を立ち上げ、校区あいプロの活動として、昨年度の秋の校区人研において、恵我南小・松原七中とのコラボレーション授業を実施した。今年度は、松原七中校区地域教育協議会予算総において、幼・小・中の教職員によるロールプレイに取り組み、人間関係学科(HRS・あいあいタイム)の情報発信を地域・保護者にむけて行った。

春の校区人研では、恵我小において、2年生・4年生が「人間関係学科(あいあいタイム)」の授業公開を実施するため、指導案の検討を校区あいプロで行った。授業公開後、武庫川女子大学大学院教授、西井克泰氏にご指導いただいた。秋の校区人研では、11年間の学びを実感するため、幼・小・中の「人間関係学科」の授業公開を実施し、その後、マザー・アース・エデュケーション主宰、松木正氏のワークショップと西井克泰教授に講演をしていただいた。また、校区としての取組を進めるため、校区合同研修も実施している。

2) 松原第七中学校

目標

松原七中では、2003年度から2005年度までの研究開発において、世界保健機構(WHO)のライフスキルを基礎にして人間関係学科(HRS)のプログラム開発を行ってきた。一つひとつのワークにターゲットスキル定め、明確に獲得目標を設定した。そして複数のワークからなるパッケージ方式をとり、子どもの状況や実態に応じて臨機応変にパッケージの入れ替えで対応できるようにした。

ストレス対処から自己肯定感の育成へと進んでいった流れを引き継ぎ、今回の研究開発においては、人間関係学科(HRS)を中心にした教育活動を通じて子どもたちに社会的有用感をいかに身につけさせていくかということが課題となっている。校内の生徒会活動、地域のボランティア活動、保育所・幼稚園・小学校の子どもたちとのブリッジ等、自己肯定感の獲得から社会的有用感の獲得へつなぐことができるプログラム開発が、子ども

たちの成長から要求されているといえる。

今回の研究開発の目標設定において、これまでのWHOの10個のライフスキルを、更に『高次の、様々な文脈を通じて通用しうる「ジェネリックスキル」』（2006年5月大阪府ハートフル推進事業連絡協議会における松蔭女子大学学長、森田洋司氏の講演より）として設定し、これまでのプログラムの再編成、ターゲットスキルの読替作業を進めていく段階に入っている。本年度は、ターゲットスキルの高次化への移行期間としてとらえ、従来設定してきたWHOのライフスキルを基礎としたワークの中に、WHOの10個のスキルにとらわれないジェネリックスキルを基礎としたワークをどう関係づけて取り入れていくかということ、その理解とともに進めてきた。次の表は、WHOの10個のライフスキルとジェネリックスキルを関係づけたものである。

WHO ライフスキル	ジェネリックスキル
自己認識 共感性	自己信頼 自己管理能力
対人関係スキル	対人関係 境界設定 ピア・プレッシャーへの対抗
効果的コミュニケーション	コミュニケーション力
意志決定 問題解決力	決断と問題解決
ストレスへの対処	ストレス対処
情動への対処	感情対処
創造的思考	
批判的思考	
	時間管理
	計画性
	情報活用力

各学年の実施プログラム

a) 1年生（24期生）

一 学 期	1	人間関係学科（HRS）ってなあに？ 『中学校入学！さあ新しい自分に出会おう』
	2	効果的コミュニケーション
	3	『わたしのコマーシャル』
	4	～ 仲間に新しい自分を表現しよう
	5	効果的コミュニケーション 『わたしのじゃがいも』
		『新しい仲間との関係をつくろう』
	6	意志決定・対人関係スキル 『さいころトーキング』
	7	対人関係スキル ロールプレイ『こんな時 どうする？』

二 学 期	8	自己認識・共感性 『こんな時 どうした？』
	9	効果的コミュニケーション 対人関係スキル 『クラスみんなで なんでもキャッチ』
	10	問題解決 『アニメの村』
	11	効果的コミュニケーション 『流れ星』
		『仲間との関係について考えよう！』
	12	効果的コミュニケーション 『伝えてねゲーム』
	13	学校生活調査 + HRS 自己評価表
	14	共感性・問題解決 『新聞ジグソー』
	15	意志決定・対人関係スキル 『すごろくトーキング』
	16	対人関係スキル・境界設定 『ふわふわ&とげとげ』
	17	対人関係スキル・境界設定 『伝言ゲーム「それってほんま？」』
		『ストレスに気づき、 ストレスをマネジメントしよう』
	18	ストレス対処 『ストレス・チェック』
三 学 期	19	ストレス対処 『ストレス・ゲーム』
	20	ストレス対処 『ストレスのメカニズム』
	21	ストレス対処 『ストレスをマネジメントしよう！』
	22	ストレス対処 『アサーションで関係ばっちり1』
	23	ストレス対処 『アサーションで関係ばっちり2』
	27	学校生活調査 + HRS 自己評価表
		『豊かな発想で問題解決を！』
	28	対人関係スキル・共感性 『ルーレットトーキング』
	29	対人関係スキル・情動対処・創造的思考 ロールプレイ『怒っているぞ！』
	30	対人関係スキル・決断と問題解決
	31	情報活用力
	32	『ルールづくりを考えよう1・2・3』
	33	学校生活調査 + HRS 自己評価表

b) 2年生（23期生）

一 学 期	1	人間関係学科（HRS）ってなあに？ 『さあ新学年！新しい自分に出会おう』
	2	効果的コミュニケーション・スキル
	3	『わたしのコマーシャル』
	4	～ 仲間に新しい自分を表現しよう
		『コミュニケーション法を学ぼう』
	5	自己認識 ソーシャル・スキル・アンケート

二 学 期	6	効果的コミュニケーション 『On the desk』
	7	効果的コミュニケーション グループワーク『伝達ゲーム』
	『人とのつながりを深め、物事を解決しよう』	
	8	ストレス対処 『「アイウエオ」で 気持ちを伝えることができる』
	9	ストレス対処・対人関係スキル 『スパイダーリフト』
	10	対人関係スキル・問題解決 ストレス対処 『「もめごと」だって解決できるさ』
	11	共感性・対人関係スキル 『サイコロ・ドゥーイング』
	12	学校生活調査＋H R S 自己評価表
	『職場体験に必要なスキルを身につけよう』	
	13	自己認識・共感性 『サイコロ・トーキング』
	14	意志決定スキル『気球に乗って世界旅行！』
	15	効果的コミュニケーション 『ボディ・ランゲージ・ゲーム』
	16	効果的コミュニケーション 『見るだけテレビ・聞くだけテレビ』
	17	情動対処 『自分の感情をコントロールしよう』
	18	職場体験シミュレーション学習
	19	
	『仲間との関係、自分のありかたを 見つめ直そう！』	
	20	共感性・効果的コミュニケーション 『フィーリング・フレンドシップ5×5』
	21	問題解決・効果的コミュニケーション 『財宝を探せ！』
	22	学校生活調査＋H R S 自己評価表
三 学 期	『スキー合宿クラスミーティング直前 ストレスに負けない方法を学ぼう』	
	23	対人関係スキル 『それは私です』
	24	対人関係スキル・共感性 『すごろくトーキング』
	25	効果的コミュニケーション・スキル
	26	『クラスミーティングの作文を書こう』
	27	
	28	ストレス対処 『クラスミーティング シミュレーション・トレーニング』
	『今までの自分の成長を確認しよう』	
	29	創造的思考 『楽しいこと・がんばったこと100個』
	30	創造的思考 『わたしの何が変わったかな？』
	31	創造的思考 『何か変だな？』
	32	学校生活調査＋H R S 自己評価表

c) 3年生（22期生）

1	人間関係学科（H R S）ってなあに？
『中学校最後の年のはじまり』	

一 学 期	新たな自分に出会おう』	
	2	効果的コミュニケーション・スキル
	3	『わたしのコマーシャル』
	4	～仲間に新しい自分を表現しよう
	『修学旅行直前 仲間と分かち合う大切さを学ぼう』	
	5	効果的コミュニケーション 『こんな時 どうする？』
	6	対人関係スキル・問題解決『人文字大作戦』
	7	対人関係スキル・問題解決『名画ジグソー』
	『修学旅行を終えて 仲間と力を会わせる方法を学ぼう』	
	8	対人関係スキル・問題解決『トラスト』
	9	対人関係スキル 『しりとり大作戦』
	10	境界設定 『線』
	『職業調査にむけて 社会に通用するスキルを身につけよう』	
二 学 期	11	意志決定 『調べたい職業を決めよう』
	12	対人関係スキル・問題解決 『職業調査 アポの取り方』
	13	学校生活調査＋H R S 自己評価表
	『ステップ・アップ・マナー』	
	14	対人関係スキル 『社会に通用するスキルを学ぼう』
	15	対人関係スキル『ロールプレイで面接練習』
	16	対人関係スキル『これが採用テストだ』
	17	対人関係スキル 『テストにだってスキルが必要！』
	『進路決定にむけて 積極的な考え方を手に入れよう』	
	18	自己認識・創造的思考 『自分の長所を見つけよう！ 味方を変えれば世界が広がる』
	19	学校生活調査＋H R S 自己評価表
	『卒業を前に、自分の成長を自覚し、 仲間との関係をふりかえろう』	
三 学 期	20	対人関係スキル『正式な書類の書き方』
	21	ストレス対処『面接なんてこわくない！』
	22	共感性 『未来にむけて 仲間との成長を確認しよう』
	23	自己認識・対人関係スキル 『後輩におくることば』
	24	学校生活調査＋H R S 自己評価表

各学年の人間関係学科（HRS）の流れ

1年	学校行事・生徒会行事	学年のとりくみ	人間関係学科の取組
4月	始業式 オリエンテーション 家庭訪問	前期クラス体制づくり 人間関係学科（通年） 前期全体総合開始	【1】自己認識（新しい自分に気づく） （自分の長所・短所を認識する） 『新しい自分に出会おう』
5月	授業参観 中間テスト	校外学習	【2】効果的コミュニケーション （言語的・非言語的コミュニケーションを学ぶ） （人の話をよく聴く） 対人関係スキル（共同作業を通して協力しあう） 『新しい仲間との関係をつくろう』
6月		「いのち」学習	【3】対人関係スキル・境界設定（仲間との適切な距離感を考える） 『仲間との関係について考えよう』
7月	期末テスト		
8月	生徒会主催校区子ども交流会「涼もう会」		
9月	体育大会		【4】共感性（人に対して寛大になる）『仲間と協力しよう』
10月	生徒会後期役員選挙 中間テスト	「しんろ」学習 後期クラス体制づくり 後期全体総合開始 校外学習	【5】ストレス対処 （ストレスのメカニズムを知る） （ストレスをコントロールする方法を知る） （自分を変えることのできない状況に対処する） 『ストレスに気づき、ストレスをマネジメントしよう』
11月	校区国際文化フェスタ		
12月	期末テスト		
1月	生徒会主催校区子ども交流会「HOT ×ほっと会」	「ちがひ」発見学習	【6】対人関係スキル（仲間関係の深まりと適切な距離感のバランスを考える） 決断と問題解決（違った意見を受けとめよりよい方向をさぐる） 情報活用（収集した情報を有効に生かす） 『豊かな発想で問題解決を』
2月			
3月	学年末テスト 卒業式		

2年	学校行事・生徒会行事	学年のとりくみ	人間関係学科の取組
4月	始業式 オリエンテーション 家庭訪問	前期クラス体制づくり 人間関係学科（通年） 前期選択・全体総合開始	【1】自己認識（新しい自分に気づく） （自分の長所・短所を認識する） 『新しい自分に出会おう』
5月	授業参観 中間テスト	校外学習	【2】効果的コミュニケーション （人の話をよく聴く、アサーティブネス） 『コミュニケーション法を学ぼう』
6月		「いのち」学習	【3】ストレス対処（アサーティブネス） （困難な状況を扱うための対処法を学ぶ） 対人関係スキル（共同作業を通して協力しあう） 問題解決（集団的に問題を解決する方法に気づく） 『人とのつながりを深め、物事を解決しよう』
7月	期末テスト		
8月	生徒会主催校区子ども交流会「涼もう会」		
9月	体育大会		【4】意志決定 （自分の意志で、自分に適した選択をする） 効果的コミュニケーション （言語的・非言語的コミュニケーション） （人の話をよく聴く）（内気を克服する） ストレス対処（プレッシャーの下で落ち着きを保つ） 情動対処（不安・喜怒哀楽の感情をコントロールする）
10月	生徒会後期役員選挙 中間テスト	「しんろ」学習 後期クラス体制づくり 後期選択・全体総合開始	
11月	校区国際文化フェスタ		

		職場体験学習	『職場体験に必要なスキルを身につけよう』
12月	期末テスト		【5】 共感性（人に対して寛大になり、他人をケアする） 対人関係スキル（対人関係をつくったり、終了したりする） 『仲間との関係、自分のありかたを見つめ直そう』
1月	生徒会主催校区子ども交流会「HOT ×ほっと会」	スキー合宿	【6】 効果的コミュニケーション （内気の克服、人の話をよく聴く） ストレス対処（プレッシャーの下で落ち着きを保つ） 『スキー合宿クラスミーティング直前 ストレスに負けない方法を学ぼう』
2月		「ちがひ」学習	【7】 創造的思考（ポジティブな思考を手に入れる） （豊かな発想で自分を表現する） 『今までの自分の成長を確認しよう』
3月	学年末テスト 卒業式		

3年	学校行事・生徒会行事	学年のとりくみ	人間関係学科の取組
4月	始業式 オリエンテーション 家庭訪問	前期クラス体制づくり 人間関係学科（通年） 前期選択・全体総合開始	【1】 自己認識（新しい自分に気づく） （自分の長所・短所を認識する） 『新しい自分に出会おう』
5月	授業参観 中間テスト	「しんろ」学習 修学旅行	【2】 意志決定スキル （選ぶことの意味を理解し、積極的に意志決定する） 対人関係スキル（共同作業を通して協力しあう） 問題解決スキル（集団的に問題を解決する方法に気づく） 『修学旅行直前、仲間と分かち合う大切さを学ぼう』 『修学旅行を終えて、仲間と力を合わせる方法を学ぼう』
6月		「いのち」学習	【3】 対人関係スキル（新しい人間関係を築く方法を学ぶ） 効果的コミュニケーション（内気を克服する）（交渉） ストレス対処（困難な状況を扱うための対処法を学ぶ） 『職業調査にむけて 社会に通用するスキルを身につけよう』
7月	期末テスト	職業調査	
8月	生徒会主催校区子ども交流会「涼もう会」		
9月	体育大会	職業調査	【4】 対人関係スキル（信頼して共同作業を進める） 『仲間と力を合わせて共同作業を進めよう』
10月	生徒会後期役員選挙 中間テスト	「しんろ」学習 後期クラス体制づくり 後期選択・全体総合開始	【5】 共感性（友だちをつくる） 対人関係スキル（適切な対人行動のための限界を知る） 効果的コミュニケーション（アサーティブ・内気を克服する） ストレス対処（自分が変えることのできない状況に対処する） 『ステップアップ・マナー』
11月	校区国際文化フェスタ		【6】 創造的思考（ポジティブな思考を手に入れる） 意志決定スキル（現実的な目標を立て、積極的に意志決定する） 批判的思考（不平等や不正さ、偏見を認識する） 『進路決定にむけて 積極的な考え方を手に入れよう』
12月	期末テスト		
1月	生徒会主催校区子ども交流会「HOT ×ほっと会」 学年末テスト	「しんろ」学習	【7】 共感性（人に対して寛大になり、他人をケアする） ストレス対処（プレッシャーの下で落ち着きを保つ） 自己認識（自分をふりかえり、長所・短所を認識する） 創造的思考（豊かな発想で自分を表現する） 『卒業を前に自分の成長を自覚し、仲間との関係をふりかえろう』
2月		未来にむけて 卒業にむけて	
3月	卒業式		